

# News Letter

Foreign Student Service, Agriculture

## 遺伝資源を考える

田中正武

(木原記念横浜生命科学振興財団常務理事)  
京都大学名誉教授・農林生物学教室)

文明が発展し、人類が栄えるにつれ、人口と食糧の不均衡は必然的に起こる現象であろう。既存の作物のみに依存する時代においては、その地域の人口の保有限界が自ら規制されてくる。したがって、食糧危機は過去いくたびか繰り返されてきた。その危機を克服したのは、他の地域との交流によって、新しい栽培植物が伝播され、その結果、農業生産の拡大をもたらし、伝播地域での食糧増産に寄与したことによる。

一方において、文明の発展は人間の地球に対する支配力をますます増大させ、その結果、地球上の自然界を加速度的に破壊している。そして、われわれが直面せざるをえない将来の食糧問題を解決するために重要な鍵となる遺伝資源は、消失の一途をたどっている。今日失われつつある遺伝資源には栽培種のほか、特に未開発の野生種および栽培植物の起原に関与した野生種など、人類にとって幾多の可能性をもつ素材が含まれている。これらの野生種は、栽培種に比べ量的にみても質的にみても、格段の豊富な遺伝子群をもつものである。

近年ようやく世界各国においても、遺伝資源確保の必要性が認識され、国際遺伝資源理事会 (IBPGR) が1974年に発足し、国際的な協力のもとで、いわゆる「遺伝子バンク」という形での有用遺伝資源の探索・収集・保存の必要性が提起された。その構想は、野生種および栽培種のいかなを問わず、地球上の遺伝資源を可能な限り探索し、開発・利用のために保存することに力点を置いたものである。そして、IBPGR 傘下の国際的ネットワークが組織され、着々と成果をあげている。

わが国では、すでに IBPGR より早く1971年に筆者が属していた本学部の附属植物生殖質研究施設 (生殖質とは遺伝資源と同一語) が設置され、木原均博士以来の10回以上に及ぶ探索によって得られた莫大な収集系統が保存されており、特にコムギとその近縁野生種の収集系統は世界唯一のコムギの国際的センターとしての役割を果たしている。

世界の各国においても遺伝資源探索のために世界各地に探索隊を出している。IBPGR は各種作物の遺伝資源探索の推進を開始し、最初に IBPGR Training course of wild wheat species を1977年に実施した。このトレーニング・コースはコムギの野生種とその近縁植物の探索収集のトレーニングを目的とし、本学の故山下孝介名誉教授と筆者が講師として、トルコの Izmir の Aegean Regional Agricultural Research Institute において実施された。参加者はコムギおよびその近縁種が自生している近東地域の若い研究者が主で、15ヵ国、17人の参加のもとで実施された。

我が国においても、IBPGR の要請によって国際協力事

業団 (JICA) の主催で、1982年以来、毎年3ヶ月の長期にわたる遺伝資源に関するトレーニング・コースを開催している。汎太平洋の国々を主な対象として、講義、実習、さらに見学旅行と内容も年々充実され、筆者も第1回～第4回まで、遺伝資源の基本的概念というような講義をしてきた。

遺伝資源とは、必ずしもそのものが直接的に利用されて役立つとは限らないが、少なくとも人類に有用なもの、またはその可能性があるものをさす。遺伝資源という語は、時として資源生物とか、大部分が直接利用可能な資源すなわち生物資源と混同されがちであるが、それは全く別のものである。

近年、近代農業における高収量性、機械農業への適性、加工適性などの市場圧力などが原因となって、世界的規模で、優良品種という特定少数のものが普及され、その結果、遺伝的画一化が進められている。限られた系統から育成された遺伝的に画一された品種に生産基盤を大きく依存した結果、招来した壊滅的打撃に関しては多くの歴史的教訓がある。そこで、今や世界をあげて、栽培植物の野生祖先種およびその近縁種、さらに将来科学の進歩によって、遺伝子導入可能と予想されるその周辺植物を遺伝資源として広く探索し、確保する必要がある。とくに遺伝資源の価値は、人類に有用な栽培植物のそれぞれに対して、できるだけ多くの変異を収集することで発揮されるものである。世界の食糧問題の現状は必ずしも楽観を許さない。世界をあげて遺伝資源の確保に努力すべきである。遺伝資源は人類共通の財産であり、これらの遺伝資源の保全・確保は国際協力によって始めて可能となる。したがってこれは21世紀を迎える人類のためになすべきわれわれの任務であろう。



中国・新疆省アルタイ地区のコムギ畑における収集活動  
(国際植物調査隊1989に参加、右端筆者)

## これでも国際化？



ケジャブ・ラル・マハラジャン

（広島大学総合科学部）  
（本学部農林経済学科卒・同専攻修了）  
ネパール

昨今日本では、国際化は一つのブームになっている。いろいろな人がそれぞれの立場から国際化のイメージを捕えようと努力している。国政を担う人と街角の人が持つ国際化のイメージは全く別のものかもしれないが、皆が国際化について考え、それらしい行動をとらなければならない時に来ている。国際化とは何か？ 私なりに考えた国際化とは、異文化・人との出会い、その交わりである。その交わりの中では、個々人が主人公であり、それぞれが国際化のメッセンジャーである。国政、地方行政、大学・学校の設備・制度、企業などの規則、生活基盤の設備とそれぞれを担う人達の公・私人としての国際化への理解とそれに対する態度、国民的コンセンサスなどは国際化を進める上で周辺から援護するものであろう。

日本という場を考えると、国際化はまず異文化人（外国人）の日本への上陸から始まるが、三ヶ月以上の滞在に伴う居住地の役所における外国人登録、在留許可の更新などの時、行政やそれを担当する公務員との出会いで国際化の第一歩が始まる。以降、その人の身分と目的にもよるが、例えば留学、研修などの場合は、それぞれ学校の設備・制度、関係者（先生、事務官）との出会い、また就労者の場合、職場の人々と制度・規則に出会い、国際化の次のステップを踏むことになる。また、彼らが住み始める時もその居住地域での郵便局、電話局、ひいては保育園、小学校、病院、公園、市場などの生活基盤の設備・制度とその関係者との出会いがある。外国人が日本に来て一番最初に出会うのは公務員を初めとする公人で、その最初の印象が大きなインパクトを持っているため、行政、公的設備・制度、これらの公人が国際化に果たす役割はとても重要である。だが、これを担う人達の態度が真に国際化を進める上でどこまでそれを援護しているかという点と、外国人登録制度や役所の行政、地域住民へのサービスなどを見ると失望せざるをえない。

外国人登録制度には二つの問題がある。一つは、外国人登録証明書の常時携帯で、日本人に例えるならば、戸籍謄本の常時携帯を強要するようなもので、事実上不可能な制度である。もう一つは、例の指紋押捺である。在日韓国人（北朝鮮や中国人は？）に対して二年後に一部緩和される動きはあるが、その他の異文化人の場合はどうなるのか不明である。今だに当り前のようにこれらの制度が施行されているのは、国際化時代においてあまりにふさわしくないものである。指紋押捺を強要するもう一つの行政と言えば、スピード違反の場合がある。運転免許証を取得する際、日本人は判子、異文化人（一部）はサインを用いるが、スピード違反をすると、サインではなくあたかも重犯罪人かのように指紋押捺を強要される。このような行政の存在すら国際化時代に逆行するものである。さらに、これらの行政執行に当たる人達の態度はあきれたものだ。こういう態度は大いに制度に裏打ちされたものであろうから、制度から正すべきであらう。

国際化にふさわしい地方行政、地域住民へのサービスがどこまで充実されているだろうか。各役所に言葉を話し、地域住民の異文化人に対する担当者がいないというだけではなく、パンフレットの案内書類さえも国際化のニーズに答えるにはほど遠い。道路標識なども同様だ。地域住民に生活情報の整備とその情報などがどれだけ提供されているだろうか。地域住民に行政サービスを提供する末端の公民館などにおいて日本人に異文化を伝える、異文化人に日本文化を伝えるプログラムは果してあるのだろうか。大都會の先進的1、2の地域以外は無に等しい。これらの情報不足によって住民間でしばしば摩擦が起こりうる。例えば、よく報道される「ゴミ捨て」問題だが、その制度が日本人にとっては当り前のものでも、異文化人にとってはゴミ捨て場もそのルールも説明されない限り分らないものである。ちょっとした行政サービスの工夫によってこのような摩擦は回避されうるだろう。日本人が当り前だと思っているどんなささいな情報でも異文化人には生活上の欠かせないものであり、これらの具体策を一つ一つ充実していかない限り真の国際化は有り得ないだろう。

街角の人と国際化を考える場合、一個人としての国際化との付き合いには自然な興味、普通の行動が大事である。自然の興味というのは、異文化人である相手のことをめづらしがったり、過大評価したり、差別したり、いわゆる過剰意識をするのではなく、自然にその人のこと、その人の文化のこと、その人の国のことに興味を持ち、それを知ろうとする努力である。その努力というのは特別のことではなく普通の行動である。出会い、そして交わっていく上で、それはお互いに認識し、一人間として、与えられた状況の中でとるべき行動をとれば、それは国際化につながっていくものである。その人のことを知りたいといっていきなりプライバシーに関わることまで聞いたりはいしない。もちろん、人種、民族、国籍、職業等のバイアスを持って接することは国際化のガンであらう。逆に、道を訪ねられたらそこまで連れていくという親切過ぎる行動も取らない。しかし、それは困った時に聞かれたこと、求められたアドバイス、手助けをも無視することではない。そのバランスは、やはりその人間のこと、その背景にある文化をよく理解した上で芽生えるものであろう。それは自然な興味、普通の行動から生まれるものであり、それによって行政、制度の不備や弱点も補えるはずである。

国際化のもう一方の当事者である異文化人もまた、日本に来て日本の文化・人に出会っている以上、それを理解する努力は絶対に必要である。中でも、日本文化の特徴と言われるものは、異文化人らのそれとは異なる点が多いので特に注意し理解に努めなければならない。それと同時に、日本人に対して国際化のメッセンジャーとして、自分の文化を伝達し理解してもらおう努力もしなければならない。その手段として自国の庶民の生活、文化を機会がある度に日本人に提供し、自然な興味を持たせ、普通の行動を取らせることによって国際化を図ることができる。それができなければ日本へ来た意味がなくなってしまう。

国際化の時代と言われている昨今、その国際化の内容が問われている。時代遅れの国際化に逆行するような行政は正さなければならない。国政は国民の気持ちを理解して、行政サービスは住む人の気持ちになって行わなければならない。一個人として国際化とつき合う際には、日本人も外国人も互いに適度のアドバイスと適切な手助けで友情を育みながら互いを認め合い、共通する点を土台にし、腹を割ってつき合い、行政・制度の不備などを補っていかなければならない。 葉月、吉日（広島にて）

Kyoto Thai Students Association



Piyasak Chaumluk

(Lab. of Plant Pathology)  
Thailand

Somewhere between friends and relatives; an image reflecting ones-own family relationships always plays a key role in the real bond among the members of Thai students. This bonding led to the creation of a union of Thai students here, known as the Kyoto Thai Students Association. In co-operation with the Thai Students Association in Japan, under royal patronage, and the Kansai Thai Students Association, the Kyoto Thai Students Association intends to;

- 1) foster a spirit of kinship and unity among its members.
- 2) encourage the development of mutual understanding and the exchange of experience and ideas among its members as well as other foreign students, based on a spirit of equality.
- 3) promote cultural exchange between Thailand, Japan and other countries.
- 4) promote co-operation with other organizations having equivalent objectives.
- 5) be the Kyoto Thai students' representative in any activity involving Thai, Japanese and others in the area.

In accordance with the above objectives, this year we have launched a program toward mutual assistance. One result of this program was the compilation of a booklet listing essential information to make living in Kyoto easy. This has already been distributed among the new comers. We also have an up-to-date telephone directory and a quarterly brochure, called "San Sumpun"—a weaving of

relationship as the term coined. This brochure is meant to be a medium through which every member can share and exchange experiences and ideas. It is run by the editorial board whose members are drawn from our membership and shifted at times.

For the members to become familiar with one another, an additional one day trip and parties are organized throughout the year from a welcoming spring party, a welcoming autumn party, a New Year's party to a farewell party, the major purpose being to induce and support the affiliation and familiarity among our members, with fun and games as a minor objective.

As part of the program to promote cultural exchange between Japan and Thailand, we were involved in activities such as distributing tourist information, setting up a stall at and performing Thai arts upon the request and booth exhibition during Kyoto University's November Festival, etc.. We plan to continue with these kinds of activities in the future. Last year, in collaboration with the Kyoto City International Foundation, the Foundation for Handicapped Children, and the Kyoto Univ. UNICEF club, "Thai Night", a charity concert for the benefit of handicapped children was held and made the mark with flying color in cultural exchange and also made a profit of ¥400,000 which was sent back to aid disabled children in Thailand. This year, with the help of the Kyoto Private High School Librarians Assembly we participated in the Kyoto Inter-High School Library Fair by putting on a performance of Thai arts and also exchanging culture with Kyoto high school students.

All our activities are organized in order to encourage maximum participation by all members, encouraging them to share the responsibilities as one does in a family. So far we have organized a public relations team, a performing arts team, a recreation team and a kitchen team.

With only 43 members (including 4 visiting scholars) this year, we will join together and work hand in hand towards achieving our objectives; studying, researching and social activities—the obligation of all members of the Kyoto Thai Students Association.

留学生室ニュース

新入留学生のためのオリエンテーションと  
歓迎パーティー

本年も24名の新入留学生を迎え、オリエンテーションの後、歓迎パーティーが150余名の参加者をえて学部大会議室で行われました。農学部国際交流推進後援会の援助の他、アサヒビール、京大生協、キリンビール、月桂冠、サッポロビール、サントリー、雪印乳業から御高配を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

見学旅行

農学部留学生室が学生部の援助と農学部事務室の協力を得て企画・実施する見学旅行は本年度で4度目となり、総勢24名の参加者をえて7月15日より17日の間に行われました。第一日目には京都大学防災研究所附属地震予知研究センター鳥取観測所と鳥取大学乾燥地研究センターを訪問しました。その日は鳥取市内に宿泊しました。翌日は鳥根県に移動し、出雲大社を経て宍道湖を一周する行程で松江市に入り、中国四国農政局中海干拓事務所を訪れ干拓地の概略の説明を受けてから現地を見学しました。中海干拓地見学に際しては干拓事務所から車の手配を受け、広大な事業地の実際を短時間で効果的に把握することができました。最終日には伯備線で中国山地を縦断し、岡山県の倉敷市を見学した後、岡山市にある後楽園を訪れ、夕方新幹線で全員無事京都に帰りました。地震予知センターの小泉尚嗣先生と技官の方々、鳥取大学乾燥

地研究センターの山根昌勝先生、中海干拓事務所の本間新哉課長の皆様には各施設の案内・説明のほか留学生からの質問に対して親切にお答えいただく等大変御世話になりました。お礼申し上げます。今回は事務室から第二教務掛の瀬戸範浩氏、人事掛の岡勇二氏に参加していただきました。日頃業務以外には接触することが多くない事務職員と留学生が寝食を共にして親しむことのできる良い機会ともなりました。

農学部国際交流推進後援会の会員加入について

本後援会は、1988年11月に「農学部及び農学研究科・その他附属機関に在籍する外国人留学生・研究者の自主的活動を援助し、生活の健全な発展と勉学・研究への支援を図ること、並びにその他国際交流に関する活動を支援すること」を目的として発足しました。本年6月に第2回目の本後援会への会員加入のお願いをしたところ学内、学外の多数(244名、5団体)の方々からご賛同をいただきました。なお後援会の事務局は留学生室に設けられていますのでお問い合わせは当室宛にお願いします。

ア・ラ・カ・ル・ト

私費外国人留学生の大学院修士課程入試状況

9月2日から4日にかけて実施された平成4年度の大学院修士課程の学生募集に対し私費外国人留学生は、農学専攻1名(中国)、農林経済学専攻1名(中国)、林産工学専攻2名(中国)の計4名が合格しました。

## Round and About Japan



Caroline M. Takahashi  
(Lab. of Fishery Resources)  
Brazil

Travelling around a country is an excellent opportunity to know more about its history, culture and people. Getting in touch with the people and visiting many places enable us not only to understand but appreciate their ways of life and values. The foreign students of the Faculty of Agriculture were given a chance to join a trip to Tottori, Shimane and Okayama Prefectures, on July of this year, organized by the Foreign Student Advisor's Office.

The first leg of the trip was to Tottori-ken, where we visited the Tottori Observatory of the Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University and the Arid Land Research Center of Tottori University. At the Observatory, we were introduced to the kind of scientific work conducted there and the equipment utilized for detecting microearthquakes. At the Arid Land Research Center, we were enlightened on the different research activities being undertaken at the Center and showed some of the facilities installed to conduct the various activities, such as the greenhouses, the environment-controlled and growth experimental chambers, where conditions are maintained similar to those in arid lands. I was very interested with the kind of research of the Center because in my country, the desertification is a very serious problem. Little work related to revegetation and agricultural development of the arid lands is being conducted there. One other spectacular sight was the Tottori Sand Dunes which unfortunately we could only see at a distance from inside the bus because it was raining. During the first night, after dinner we all went to the room of Kawai Sensei, for a general confraternization. Everyone was requested to sing typical songs of his/her country, explaining the message of the song prior to singing.

On the next day, we went to Shimane-ken, where we visited the Izumo Taisha, a magnificent old Shinto Shrine with sophisticated architectural style. From Izumo Taisha, we proceeded to Matsue-shi and visited the Nakaumi Reclamation Project connected to Chugoku-Shikoku Regional Agricultural Administration Office. Having received an explanation of the agricultural project outlines in the area of Lakes Nakaumi and Shinjiko, we visited one of the reclaimed lands and the Nakaura Sluice Gate, one of the facilities of this project. We stayed in a small city of Shimane Prefecture that night and after dinner, once more, we wound the day merry making-singing and drinking beer and sake until late in the night.

On the last day of our trip, we left for Okayama Prefecture. At Kurashiki-shi, we visited some museums in the Ivys Square Garden, where we saw the beautiful collections of Oriental and Occidental Art. Then, we went to

the famous Korakuen, in Okayama-shi. When we arrived in the garden, it started to rain but that did not stop our enthusiasm; instead we continued with our trip. By late afternoon, we were set to return to Kyoto. On the way home by shinkansen, all of us made comments on our impressions about the trip and at that moment, the good things that we did together fled into my mind.

During this trip, we had the chance to meet people of different nationalities and personalities and therefore, with different cultures, customs and ideas. All of us learned something from one another and we all learned more about Japan. Through this kind of interaction, we can broad our circle of friendship and become more and more familiarized with our host and other foreign countries, thus acquiring an international outlook.

As foreign students, we are here in Japan to improve ourselves academically, if not professionally. We should not however limit ourselves only to the academic or professional aspects of knowledge but try to broaden our horizon of thinking to include how we relate to others. In this trip, we saw two different sides of Japan. We visited some research institutes, where advanced knowledge and equipments are utilized, showing us the modern Japan and we went to places like Korakuen and Izumo Taisha that project us to the old and traditional side of the country. So this trip was not only a scientific study tour but it availed to us many things relating to relationships, history, culture and nature. I think that this point is paramount to any other. In a nutshell, the trip was doubly instructive and a great experience to all who attended it.



Study tour: at the Tottori Observatory (left) and the Nakaumi Reclamation Project Office (right).

発行所 京都市左京区北白川追分町  
京都大学農学部留学生室  
電話 (075)753-6298, 6299  
印刷所 京都市上京区下立売通小川東入  
中西印刷株式会社  
電話 (075)441-3155~8